国際フォーラム　２１世紀における柳田国男　　2012.8.23-24

遠野文化研究センター

セツションⅢ「可能性としての文化的伝統」資料　　小田　富英

１．1960 年、プリンストン大学のマリオン・リーヴィー教授が来日した時、鶴見和子の案内で訪ねてきた時の柳田の言葉。

「たくさん外国人が日本にきて、日本の研究をするけれども、やり方が間違っている。それは、外国人は四角い言葉を話す日本人にばかり会う。けれども、ほんとうのことは四角い言葉では表現されていないのだ。ほんとうのことをいうのは円い言葉を使う日本人なんだ。あなた方は円い言葉を使う日本人にもっと積極的に会わなければいけない。」

（座談会「柳田国男の百年を問う」鶴見和子の発言『柳田国男研究』第 8 号、1975.4）

２．円い言葉を使う物書き、井上ひさしの柳田国男像（クリストファー・ロビンスへの敬意として）

「明治以降の社会で出世するには、べつにいって社会の上積みになるためには、それまでの伝統的な共同体の知恵や行動の基準となる徳目を捨ててかかる必要があった。実際にも人びとはそれらをかたっぱしから捨てて行った。だが柳田国男は、人びとの捨てたものを根気よく拾い集めた。その態度は、本書（『笑の本願』）に収められた「鳴滸の文学」一六の『方言を標準語に統一すべしというと、忽ちその棄てられた方言を馬鹿にするが、さようなヲコなることは民俗学では許されない。むしろ滅びそうだと思えば、なお懇ろに知って置かねばならぬのである。』という文章からも明らかだろう。柳田国男が拾おうとしなかったのは、百姓一揆と庶民仏教ぐらいであるが、いずれにせよ、彼の拾い集めたものは尨大な量の集積となり、それはほとんど日本常民の全歴史と等しい。このように巨きなものに向ってものをいうとき、先ず敬虔に頭を垂れてからと思うのは当然の人情であり、礼儀であり、挨拶である。さよう、柳田国男は思わず知らずこちらが挨拶をしてしまうような、そういう大先達なのだ。」

（井上ひさし「柳田国男への挨拶」『不幸なる芸術・笑の本願』岩波文庫、1979.10）

３．「伝統より伝承」「見える物より心持ち」を追い求めた柳田の敗戦後の希望と 3.11 以後の課題

「自分ほどの者の力でも、少しは今後の御役に立たうかと思ふ仕事が三つほどある。その一つは国民の固有信仰、遠い昔から有つたにちがひ無いもの、是が今までどういふ風に、引きゆがめられ居たかといふ点に心づくこと、勿論たしかな証拠が無いと、うつかりしたことは言へないので、辛苦して今材料を集めて見ようとして居る。もう一つは人の心を和らげる文学、如何なる窮乏と憂愁の生活へでも、なほ時々の微笑を配給するやうな、優雅な芸術が、日本には何か有りはしなかつたか（芭蕉翁の俳諧などはもしか其一つではなかつたか）といふやうなことも考へて見ようとして居る。

信仰と和気と、この二つは国民の活きて行く力、心の最小限度の栄養素とまで、私

たちは考へて居るのだが、或は是をすらなほ後廻しにすへきもののやうに、眼前の急務では無いかのやうに、軽しめて居る人が無いとは限らない。今はそれも到し方が無いのか知らぬが、第三のものだけは何としてもさうは言つては居られない。それは何かといふと国語の普通教育、国語を是からの少年青年に、どういふ風に教へるのが最も良いか。（中略）今が一ばんこの問題を考へて見るべき、大切な潮時であると自分は信じて居る。（「喜談日録」『展望』創刊号、1946.1『全集』第31巻）

柳田の三つの仕事とその検証

・固有信仰―『新国学談』三部作から『日本人』、『海上の道』

・和気の文学―『笑の本願』『不幸なる芸術』『俳諧評釈』

・国語教育―『毎日の言葉』から国語教科書、社会科教科書づくり

そして、3.11以後の課題　（本セッションの柱か）

4．『遠野物語』以前から戦後教科書づくりへと繋がる柳田言葉論の地下水脈（メレック・オータバシと共通の問題意識）

「口から耳への言葉の有難味が、何だか第二位へ蹴落された感があつたのである。」

「読み書きを少年に教へる技術に於て、今は以前よりどの位上手になつて居るか、比べものにならぬほど進んで居る。それで居て正直な者ほど人中で黙りこくつて居り、雀のやうによく喋る娘でも、改まつた席では暗記して来たことしか言へぬといふものが多くなつたのは、原因は果してどこに在るか。」

「とにかく内に根のある語、心で使つて居るものが其まま音になつたのを、心の外でも使ひ得るやうに是非させたい。」

「目的は各人が口でなり筆でなり、自分の言はうと思ふことがいつでも自由に言はれて、しかも予期の効果を相手に与へ得ることでなければならぬ。」

（「国語教育への期待」原題「片言と方言と」1935.4初等国語教育研究会講演。『方言』5月号に載り、千葉三里塚に住み、印旛郡の小学校教員たちの研究会を組織していた水野葉舟が読み、その後、講演に呼ばれ、再会する。『全集』第10巻『国語の将来』）

「国語の教育には先ず片言から考えていかなければならないとは、二十年も前に、私が教育当局に対し言葉を強くしてといたものであつたが、」「今となつては残念ながら年寄の世迷言」「日本の国はもつと悪くなつて、しまいには国がなくなるだろう」

「耳で聞いたことが直ぐ腹の中に入って一つの事実の認識になることが出来ない」

（「今までの日本語」1955.1、2『教育研究』『全集』第33巻）

「聞きかた教育」「いう者が聞く者に対して義務を負うような気持ちで話する」

（「聞きことばの将来」1956.7『ことばの講座』『全集』第33巻）

柳田国語科と柳田社会科の挫折は、まさに「陳勝呉広」の如し。

5．柳田没後50年を契機に　〈トイキリ〉〈マツリジマイ〉にしないために

国内では「文章道、言語道の革新」。国外では「世界文学としての共同研究」（メレック・オータバシの視点）。さらに、遠野が発信基地となるテーマ別国際交流。